

九州で進む、地域循環共生圏

～南阿蘇村と熊本県の取り組み～

はじめに

当研究所は、2020年度に環境省九州地方環境事務所および九州地方環境パートナーシップオフィスと連携して5つの地域循環共生圏づくりを支援した。シリーズ第5回の本稿では、熊本地震からの創造的復興を目指す南阿蘇村と熊本県の取り組みを紹介する。南阿蘇村と熊本県は「湧水や自然環境を活かした地域活性化」をテーマに多様なステークホルダーとビジネスによる地域経済の活性化を目指している。

1 南阿蘇村の特徴

- 日本名水百選に選ばれた「白川水源」をはじめ恵まれた湧水群、「水が生まれる里」。
- 2013年、草原の維持管理などが世界農業遺産に認定。

(1) 阿蘇の麓、南阿蘇村

南阿蘇村は、阿蘇カルデラの南部、阿蘇五岳と外輪山に囲まれた南郷谷に位置し、2005年に旧熊本県阿蘇郡白水村、久木野村、長陽村の3村が合併して発足した村である。環境省の「日本名水百選」に選定されている白川水源をはじめとして多くの湧水群があり、「水の生まれる里」として、湧水は村民のみならず熊本都市部の暮らしに豊かな恩恵をもたらしている（図表1）。

図表1 阿蘇のカルデラが広がる南阿蘇村



提供：南阿蘇村

(2) 阿蘇の世界農業遺産

2013年、阿蘇は世界農業遺産^(※)に認定された。

阿蘇地域は、千年以上続く「野焼き」などの伝統的な草原の管理方法により、木が生い茂るのを防ぎながら、あか牛の飼育に必要な草資源を確保するなど持続的な農業の営みによって雄大な自然景観を維持している（図表2）。

(※)世界農業遺産：

国際連合食糧農業機関（FAO）が、世界的に重要かつ伝統的な農林水産業を営む地域（農林水産業システム）を認定し、その保全と持続的な活用を図るもの。

図表2 南阿蘇村の世界農業遺産



提供：南阿蘇村



2 南阿蘇村が目指す地域循環共生圏

➤「新たなビジネスの創出」「熊本地震からの創造的復興」「草原・自然景観の維持による地域振興」「水源涵養・地下水保全」「エネルギーの地産地消」が大きな柱。

(1) 阿蘇の自然資本（草原、水源）

阿蘇の周囲128kmという世界最大のカルデラ地形に広がる草原は日本一の広さと言われている。しかし、1915年に364万haあった草原面積は、1990年には40.5万haと10分の1近くにまで減少している。草原保全はあか牛などのえさとなる草を育てると同時に地下水の涵養のためにも重要である。阿蘇の草原の美しさは野焼きによって保たれてきたが、近年は高齢化や畜産農家の減少で、地域の人材だけでは野焼きを継続することが困難となり、ボランティアも募って実施するようになった。

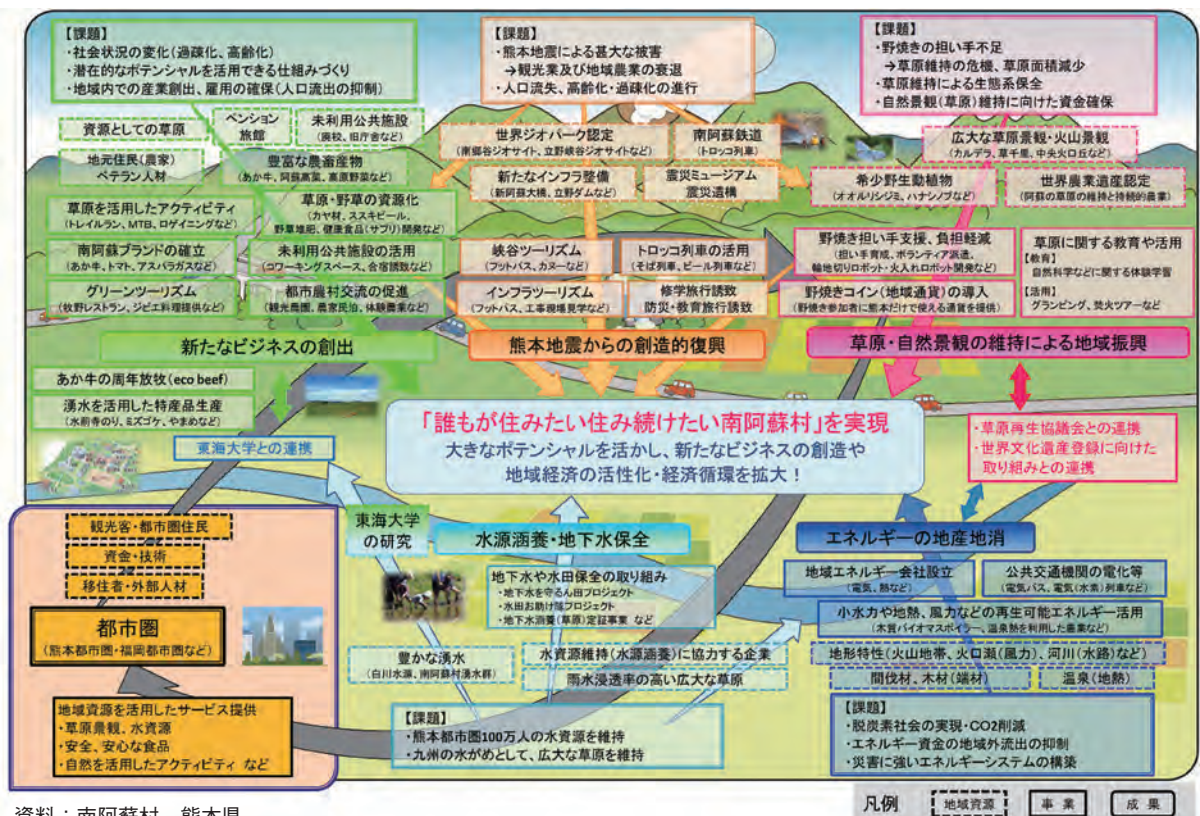
(2) 経済資本への転換（新ビジネスの創出）

本地域循環共生圏には、南阿蘇村と熊本県が協働して取り組む。村の豊かな自然資本を活かし、マネタイズして「誰もが住みたい 住み続けたい 南阿蘇村」を実現するための事業構築を目指す。

南阿蘇村と熊本県のビジョンは、「新たなビジネスの創出」「熊本地震からの創造的復興」「草原・自然景観の維持による地域振興」「水源涵養・地下水保全」「エネルギーの地産地消」の5つを大きな柱としている。豊かな自然資本と、伝統的農業などの文化資本とを活かしたむらづくりを目指す（図表3）。

南阿蘇村と熊本県は、2020年度にモデル事業を公募し、ビジョン実現に向けた事業者の活動を支援した。環境・経済・社会の取り組みにより、大きなポテンシャルを活かし、新たなビジネスの創出や地域経済の活性化・経済循環を拡大する。

図表3 南阿蘇村の地域循環共生圏のビジョン（マンダラ）



資料：南阿蘇村、熊本県

3 南阿蘇村における取り組み

- 小学校跡に設置された小型風車を活用した自然エネルギーマップ作成や草原のカヤ材の商品化など自然資本の保全と経済資本への転換に向けた取り組みが進んでいる。
- 生産者らが協働して「阿蘇珈琲」のブランド化に取り組むなど、熊本地震からの復興のため、地域のパートナーシップで新たなビジネス創出を目指している。

(1) エネルギーの地産地消

南阿蘇村は、阿蘇外輪山の西側の峡谷部に吹く非常に強い東風「まつぼり風」の常襲地帯である。この風を活かして、地域電力への効率的な転換を目指している。

モデル事業では、(株)リアムウインドが南阿蘇エリアの自然エネルギーのポテンシャル評価を行い、マップを作成した。風力に関しては、気象庁データ、NEDO風況マップや、旧立野小学校に設置している小型風車の風況データを活用するとともに、俵山やホテルグリーンピア南阿蘇（アスペクタ）に風況ポールを設置して計測した（図表4）。今後も継続調査を通して、自然エネルギーの最大利用による低炭素化や、エネルギーリサイクル意識の向上を目指している。

図表4 旧立野小学校に設置されている小型風車



(2021年6月25日 筆者撮影)

(2) 草原の保全と経済資本への転換

村の広大な草原からは、茅（カヤ、ススキ）が多く穫れるが、これまでは茅が商品になるという認識が薄く、あまり重要視されてこなかった。しかし近年取り組みが進み、火山灰の地質で生育する阿蘇の茅は良質とわかり、屋根材として京都の茅葺職人から高く評価されるようになった。

(公財)阿蘇グリーンストックは、野焼き支援等で草原の維持管理や人材育成に取り組んできた。今回のモデル事業では、茅材を地場牧野の収入源として定着させることを目指し研修会等で人材育成を行った（図表5）。茅材の安定出荷が実現すれば、文化財保護に貢献するとともに、草原保全につながる。草原保全は景観の維持のみならず水源涵養・地下水保全にも不可欠である。

図表5 茅束づくり体験



資料：(公財)阿蘇グリーンストック

(3) パートナーシップによる新たなビジネス創出

熊本地震は南阿蘇村に大きな爪痕を残した。復旧工事が進み、JR豊肥線の全線復旧や、新阿蘇大橋の開通は完了したが、今後も地域の暮らしの再生に向けて取り組み続けなければならない。

南阿蘇村の後藤コーヒーファームは、阿蘇の豊富な水や寒暖差の激しい環境を活かして、熊本農業高校の生徒とともに9年前からコーヒー豆を生産している。

モデル事業では、地域の生産者の会が南阿蘇村産のコーヒー豆のブランド化に取り組んだ。ロゴマークの策定をはじめ、会に参加する生産者5軒の栽培技術向上や、視察の受入を行った。商品にロゴマークシールを貼付して熊本県内各地で販売しており、今後も販路を拡大していく(図表6)。

地域ブランドを確立し生産量を増やすことで、所得向上や雇用の創出につなげる狙いがある。後藤コーヒーファームの後藤社長は「1杯の珈琲が地震の復興には必要、珈琲には人をつなげる力がある」と述べている。コーヒーの木のオーナー制度も設けており、関係人口創出にもつなげたい。

今後は、コーヒーの抽出滓の再利用方法も検討し、人と資源の地域循環を実現させる。

図表6 南阿蘇村で生産するASOブランドのコーヒー



資料：後藤コーヒーファーム

おわりに

南阿蘇村と熊本県は、地域循環共生圏で村の豊かな自然資本を活かし、マネタイズに繋げるため、「誰もが住みたい 住み続けたい 南阿蘇村」を実現しうる事業構築のためにモデル事業を認定し、取り組みを後押ししてきた。

直近の課題としては、関心がある事業者・団体を巻き込んでステークホルダーを増やすため、事業の普及啓発が必要である。また、今回のモデル事業が自走化するにあたり、事業拡大に係る人材育成や設備投資などの費用の捻出が課題となってくる。多くのステークホルダーを巻き込み、業種の垣根を越えて地域一体で取り組まなければならない。

南阿蘇村政策企画課の安達課長補佐は「南阿蘇の豊かな自然を後世に繋げていきたい。そのために、地域が一体となり、多くの関係者が関わるのが重要である。自治体として、事業者同士のハブとなり、繋げていきたい」と述べている。事業を通して南阿蘇村と熊本県のビジョンを実現させ、九州を代表する地域循環共生圏の構築が期待される。